

大学の世界展開力強化事業
(平成25年度採択)
平成28年度フォローアップ結果について

大学の世界展開力強化事業プログラム委員会
平成28年9月6日(火)
独立行政法人 日本学術振興会

■フォローアップの目的

「大学の世界展開力強化事業」の適正な事業管理を行うとともに、各大学における円滑な事業実施の支援、事業成果の還元のため、毎年度各大学の取組の進捗状況を確認するフォローアップを行う。

【参考：大学の世界展開力強化事業（平成25年度採択）公募要領（抜粋）】

6. その他

(2) 事業の評価等

毎年度ごとにフォローアップ活動（後述の「中間評価」実施年度は除く。）、支援開始から3年目に中間評価、支援終了後（支援開始から6年目の平成30年度）に事後評価を実施し、フォローアップ活動及び中間評価の結果は、補助金の配分に勘案されるとともに、事業目的、目標の達成が困難又は不可能と判断された場合、事業の中止も含めた計画の見直しを行うことがあります。

また、評価等については、委員会で定める評価方法、基準等に基づいて行われます。

■ スケジュール

- ・平成28年5月10日
フォローアップ実施について文部科学省から各採択大学に通知
- ・平成28年6月8日～6月10日
各採択大学からフォローアップ調査票の提出
- ・平成28年9月6日
大学の世界展開力強化事業プログラム委員会にフォローアップ結果の報告
- ・平成28年9月
フォローアップ結果の公表

■フォローアップの総括

平成25年度に採択された7件の事業について、採択時の構想の各観点における進捗状況、特記すべき事項や構想時に設定した達成目標に対する平成27年度実績(受入・派遣学生数、英語コース及び科目数)等のフォローアップを行った。

各事業の取組、課題等や学生交流の進捗状況を見ると、それぞれの事業の目的や特色等を反映した取組が行われている。特に、平成26年度から開始された本格的な学生交流に対応したカリキュラムや単位互換制度を実施している例が報告されている。一方で、受入学生に対する相手国からの奨学金等の課題や問題点について、各採択大学は引き続きその対応や解決に努めている。

事業全体の交流学生数の実績を見ると、全体で派遣人数が目標を下回っている一方で、受入人数は目標を上回っている。しかし派遣人数については堅調に推移しているため、今後は交流内容の発展が見込まれる。

今後も、本プログラムの趣旨に則り、各事業がさらに充実し、成果を挙げられることを期待する。

1. 取組の進捗状況

大学の世界展開力強化事業（平成25年度採択）平成28年度フォローアップ調査票（以下「調査票」という。）による各採択大学からの回答に基づき、下記①～④の各観点における「優れた取組」や「課題等」について、抽出・整理を行った。

- ① 全般的事項
- ② 質保証を伴った付加価値の高い魅力的な教育プログラムの提供
- ③ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備
- ④ 構想の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

① 全般的事項

(○北海道大学、東京大学、酪農学園大学)

授業の内容は各大学の特徴および強みとなる科目を提供しており、自校で実施が難しい教科をそれぞれ提供できる仕組みを構築している。

(筑波大学)

英語プログラムで提供される400以上の一般科目に加え、グローバル課題に特化した講義、ディベート演習、フィールド実習等の新設特別科目をASEAN諸国から1学期間の短期留学生とASEAN諸国に短期留学する日本人学生に提供した。

(広島大学)

各専門分野からの選出者で構成する全学の運営組織として、AIMS-HU実施部会を開催(27年度8回)した。

(上智大学)

派遣プログラムの魅力を高める試みとして、タイ留学中の学生を対象にスタディーツアーを実施した。

(早稲田大学)

カリキュラムの核とも言える共同ゼミ、専門科目、およびすべての現地語科目を開講し、学生交流が本格化した。

(立命館大学)

国際PBL(Project/Problem-Based Learning)を基軸とした本事業は、留学前学習、留学、留学後学習が一連の流れとなった3セメスターにわたる教育プログラムとして完成した。

②質保証を伴った付加価値の高い魅力的な教育プログラムの提供

(筑波大学)

主な活動は一学期間の双方向短期留学であるが、平成27年度から夏期または春期休暇中に短期間で実施するプログラム(TAG-TSSP(Tsukuba Short-term Study Program))を開始した。

(○東京農工大学、茨城大学、首都大学東京)

三大学連携による取組ならではの乗入科目(各大学の受入学生が相互に受講できる他大学の科目)については7科目を設定し、土日の集中講義とするなど多くの受入学生が受講できるよう工夫した。

(広島大学)

新たなUCTSの概念により本学と協定大学との単位互換は等価としたほか、留学前の学生に「UCTS学修計画書」の作成を義務付けて学修課程の管理を厳格化するなど、円滑な単位互換を実現した。グローバル・コンピテンシーの育成については、獲得すべきグローバル・コンピテンシーを設定したうえ、留学前・留学中・留学後の成長を評価するための評価シート及びディスクリプターを用意し、学生の自己評価に本学及び協定大学の教員がコメントを入れることにより実施した。

(上智大学)

本事業の構想に沿って開設したSAIMS科目により、「環境」をテーマに派遣学生と受入学生が共に学び合うプラットフォームを構築することができた。

(早稲田大学)

より実態に則した事業内容を遂行するため、平成27年度は、コア・パートナー大学6校との間に締結しているアデンダムを修正し、学生交流に関する条件を整備した。ASEANスタンダードへのアプローチとして、現時点(平成28年6月)ではASEAN University Network(AUN)の準会員として諸活動に従事している。

③外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

(○北海道大学、東京大学、酪農学園大学)

タイ学生受け入れのために日本では、バディシステムやチューターシステムによる受入学生のフォローアップの強化、カセサート大学からの引率教員や駐在教員の受け入れ、ITシステムへのアクセス、スキルラボの充実、学生インタビュー、アンケート調査の実施によるプログラムの改善などを行っている。

(○東京農工大学、茨城大学、首都大学東京)

派遣学生に対しては、三大学の派遣学生が一堂に会して受講する「東南アジア地誌」(東南アジアの歴史・文化環境等を学習)や派遣先大学の学生とのSkypeセッションなどの特徴的な事前教育をはじめ、査証取得のための手続きや危機管理体制など、派遣学生へのサポートに関するマニュアル(ガイドブック・安全ガイド)を作成し、学生にガイダンスした。

(広島大学)

多くの受入学生は派遣元大学から奨学金の支援が無く、経済的支援への要望が多いことから、工学分野では、独自に部局の予算を確保して、受入学生への航空運賃(片道)を支援する取り組みを開始した。

(早稲田大学)

平成27年度より導入したアカデミック・メンター制度は、受入・派遣学生が国別の担当教員より専門・関心分野に沿った指導を受ける機会として学びの効果を更に高めている。

(立命館大学)

プログラム担当教員3名を任用し、事前・事後講義科目の担当、派遣学生と受入学生へのアカデミックアドバイスおよび、授業内外における派遣学生と受入学生との交流を促進するコーディネータの役割を担った。

④構想の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

(○北海道大学、東京大学、酪農学園大学)

当該プログラム開始後に交流を行っているタイからの日本における大学院博士課程への進学が増加し、また、近年、日本—タイ間で新たな共同研究も実施されるようになった。学生同士の交流のみならず教員同士の交流にも発展しており、当該プログラムの効果が期待以上であったと考えている。

(筑波大学)

本学が有する東南アジアの3拠点を有効に活用し、AIMSプログラムにおける学生交流活動や帰国報告会での発表内容を広く公知した。また、本学では同窓会ネットワークの拡充を図っており、AIMSプログラムの帰国受入学生にも積極的な参加、協力を呼びかけた。

(○東京農工大学、茨城大学、首都大学東京)

日本人学生を「バディ」として組織し、来日前のSkype交流、来日時のアテンド、日本語クラスの実施、カルチャーツアーやスポーツ大会などのイベントなど様々な活動を行っている。

(上智大学)

平成27年10月に筑波大学で開催された第9回AIMSレビューミーティングに参加し、AIMSプログラムや参加国の最新情報を確認するとともに、相手大学との意見交換及び、参加大学全体とのネットワーキングを行った。

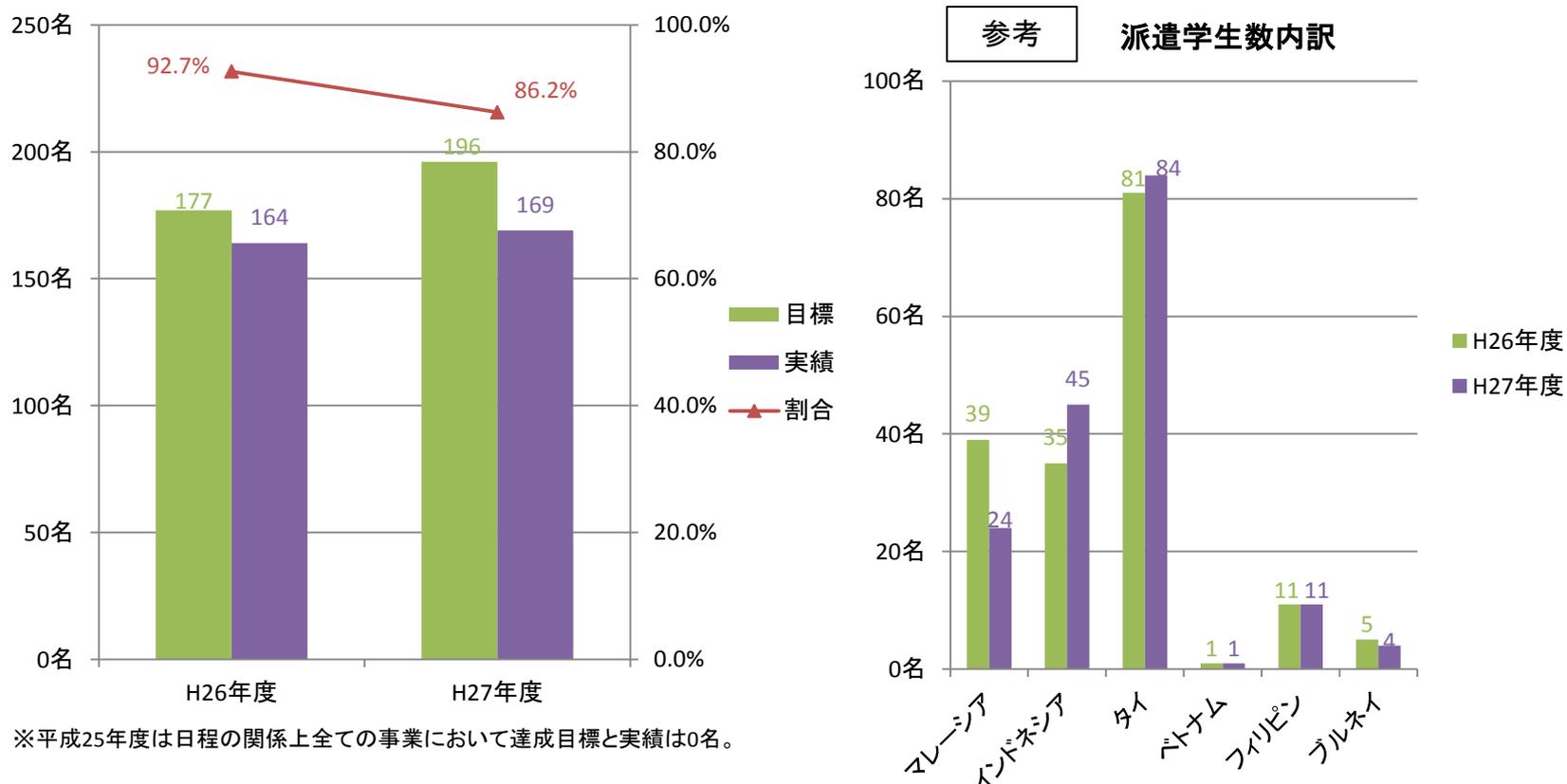
(立命館大学)

平成27年10月15日に、シンポジウム「国際PBLによるイノベータ育成 -大学の世界展開力強化事業における取り組み-」を開催し、本プログラムにおける中間の成果を発信する機会と位置づけ、プログラム実施5学部および協定校と連携することで、具体的なPBLの実践を内外に発信することができた。また、次年度派遣学生募集のタイミングにあわせて実施したことにより、本プログラムへの参加希望学生に対して、学びの動機付けをすることができた。

2. 交流学生数の実績(1)

(1-1) 交流プログラムで海外に留学した日本人学生数(派遣学生数)について【全体の状況】

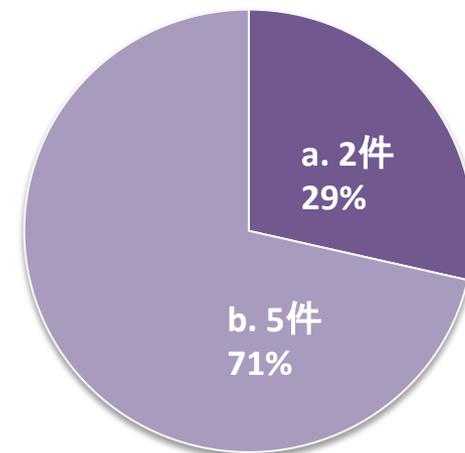
平成26年度以降の実績は目標を下回っているが、派遣学生数は増えている。



(1-2) 交流プログラムで海外に留学した日本人学生数(派遣学生数)について
【各事業の状況(平成26年度～平成27年度)】

達成目標に対する実績の割合が

- a. 100%以上200%未満だった事業
- b. 100%未満だった事業



※事業ごとの派遣学生数の詳細は別表1参照

(1-3) 交流プログラム(派遣)の進捗状況について (各大学のコメントより抜粋)

【平成27年度の達成目標に対し実績が上回っている事業】

(○東京農工大学、茨城大学、首都大学東京)

派遣学生が、現地大学で取得した単位を元に、授業時間数・科目の整合性・シラバスの一致度などを総合的に踏まえ、各大学の委員会において単位認定を行い、AIMSプログラムとしての修了認定を行った。

派遣終了後は、自身の学修成果を振り返るワークショップを行うとともに、取組内容の全学的な共有を図るため、各大学において成果報告会を開催した。大学の役職員や教員に対して報告会を実施したほか、次期 Semester での派遣を希望している学生向けの募集説明会においても、派遣プログラムの修了学生から成果を発表し、体験談を共有した。

【平成27年度の達成目標に対し実績が下回っている事業】

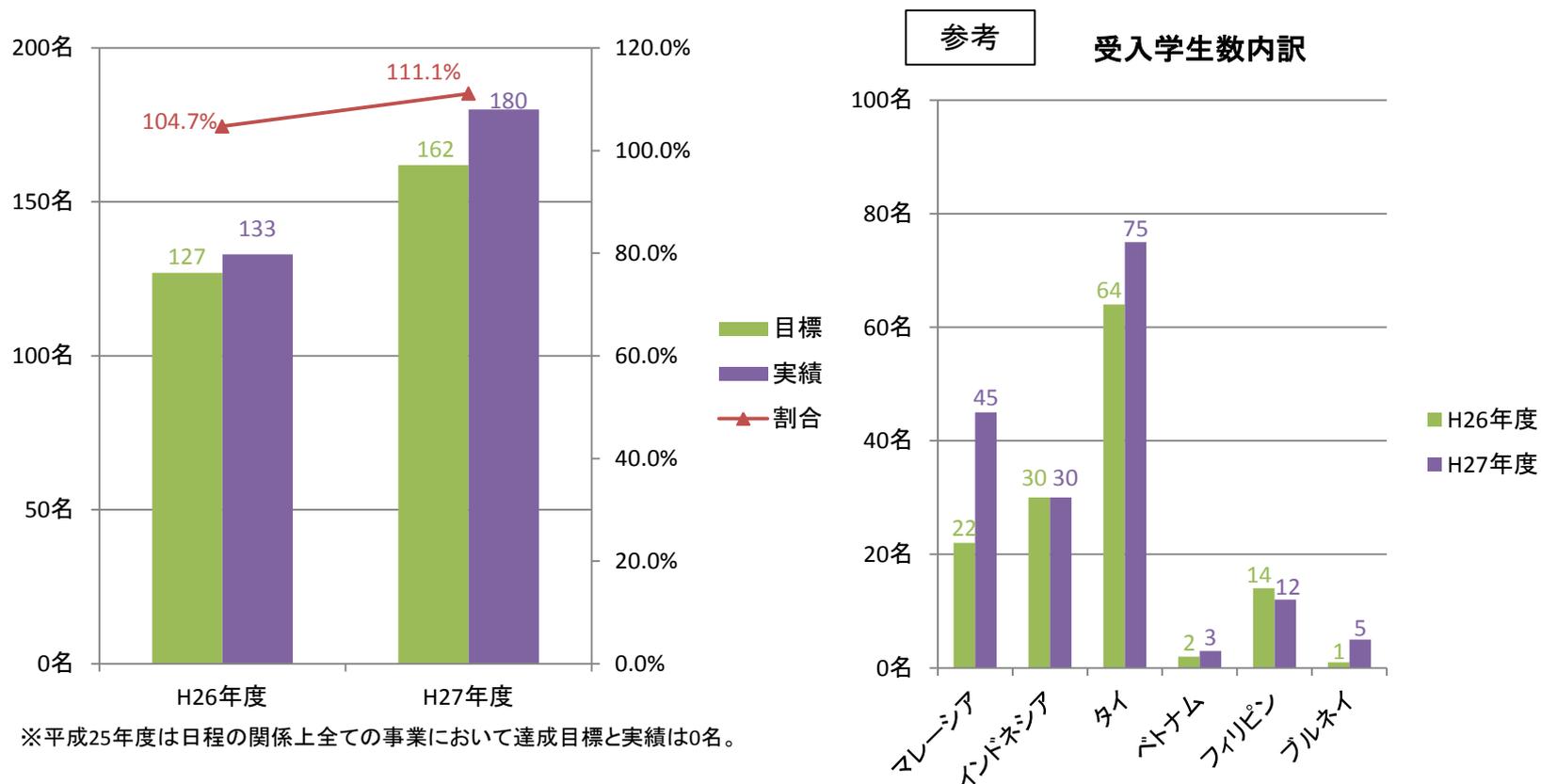
(○北海道大学、東京大学、酪農学園大学)

平成27年度は達成率80%と、前年度に比較して、派遣人数が減少したが、平成28年度では派遣希望者が増えており、減少傾向にあるわけではない。なお、派遣期間が3カ月であることから、派遣を希望しながら健康上の理由により派遣を断念した学生もいたことも付記する。今後の事業の実施においても同様の派遣実績を得ることができると考えている。

2. 交流学生数の実績(2)

(2-1) 交流プログラムで受け入れた外国人学生数(受入学生数)について【全体の状況】

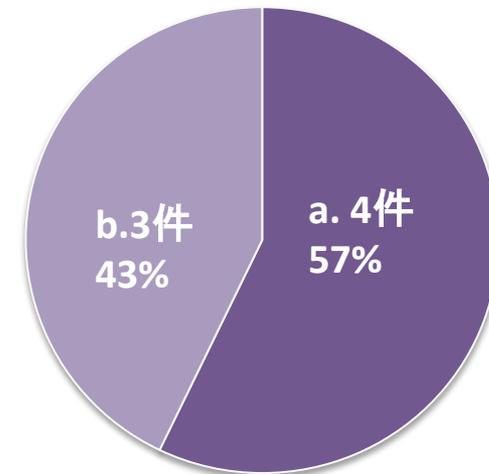
平成26年度以降の実績は目標を上回り、順調に進捗している。



(2-2) 交流プログラムで受け入れた外国人学生数(受入学生数)
について
【各事業の状況(平成26年度～平成27年度)】

達成目標に対する実績の割合が

- a. 100%以上200%未満だった事業
- b. 100%未満だった事業



※事業ごとの受入学生数の詳細は別表2参照

(2-3) 交流プログラム(受入)の進捗状況について (各大学のコメントより抜粋)

【平成27年度の達成目標に対し実績が上回っている事業】

(筑波大学)

SNSを活用した帰国受入学生のネットワーク強化、パートナー大学におけるプログラム説明会の実施、提供科目、インターンシッププログラムなどの国内活動のプログラムHPによる情報発信を強化することにより昨年度を大きく上回る受入学生を獲得することができた。幅広いパートナーとの交流の強みを生かしたグッドプラクティスの共有により、単位互換制度、学生支援システム、などの日本初のシステムの普及を進めることができた。

【平成27年度の達成目標に対し実績が下回っている事業】

(広島大学)

平成27年度は、食品科学・農学, 工学, 言語・文化の3専門分野に加え、経済分野を含む全4分野において、協定大学の推薦を受けた優秀な学生を受け入れ、受入人数は目標28人に対し26人であった。

各専門分野の内訳では、食品科学・農学分野はタイのカセサート大学から目標10人に対し目標を上回る11人を受け入れ、工学分野はインドネシアのバンドン工科大学から目標5人に対し4人を受け入れ、経済分野はタイのチュラロンコン大学から目標3人に対し1人を受け入れ、言語文化分野はタイのチュラロンコン大学から目標10人に対し10人を受け入れて目標を達成した。

3. 英語コース及び科目数の実績

【全体の状況】

①AIMSプログラムにおける英語によるコース数

○平成29年度までに設置することとしているコース数(27コース)に対する進捗割合は74.1%。

②英語による授業の科目数

○全授業科目数に対する英語による授業科目数の割合は、目標を達成。

	割合	全授業科目数	英語授業科目数
目標	5.2%	71,389科目	3,683科目
実績	6.5%	51,499科目	3,370科目
差	+1.3%		

○AIMSプログラムにおける英語による授業科目数[単位数]の設置実績は、目標を達成。

	英語授業科目数	[単位数]
目標	1,065科目	1,680単位
実績	1,418科目	2,699単位
差	+353科目	+1,019単位

※事業ごとの英語コース及び科目数の詳細は別表3参照